

たけとりものがたり  
竹取物語

むかし、あるところにおじいさんとおばあさんが住んでいました。おじいさんは山から竹を取って来て、いろいろな物を作って、売っていました。

ある日、おじいさんは不思議な光を出している竹を見つけて切りました。中には小さな、かわいい女の子がいました。子供がいないおじいさんとおばあさんはとても喜んで、女の子に「かぐや姫」という名前をつけて、大切に育てました。かぐや姫はどんどん大きくなって、とてもきれいになりました。

美しいかぐや姫のことを聞いて、男たちが結婚を申し込みに来ました。「どうぞ、かぐや姫と結婚させてください。」おじいさんはかぐや姫に男たちの気持ちを伝えましたが、かぐや姫は結婚したくないと言いました。

しかし、5人の男があきらめなかったので、「わたしがお願いした物を探してきた人と結婚します」と言って、男たちを遠い国へ行かせました。かぐや姫が男たちに頼んだ物はとても珍しくて、探すのが大変でした。

一人はインドへ仏の石の鉢を探しに行きました。一人は東の海にある山へ行って、宝石でできた木の枝を取って来なければなりません。一人は絶対に燃えないねずみの皮の着物を探しに中国へ行きました。一人は竜の首の玉を、一人はつばめが持っている珍しい貝を取って来なければなりません

でした。しかし、<sup>さんねんす</sup>3年過ぎても、だれも頼んだ物を持ってこれませんでした。<sup>むり</sup>無理なことをして、<sup>びょうき</sup>病気になった男や死んでしまった男もいました。

<sup>てんのう</sup>天皇もかぐや姫が好きになり、<sup>つま</sup>妻にしたいと思いました。<sup>なんかい</sup>何回も<sup>てがみ</sup>手紙で<sup>きも</sup>気持ちを伝えましたが、「はい」と言わせることはできませんでした。

そして、また<sup>さんねん</sup>3年が過ぎて、<sup>なつ</sup>夏になりました。かぐや姫は毎晩月を見て泣くようになりました。

「かぐや姫、どうしたの？」

「わたしはこの<sup>せかい</sup>世界の<sup>もの</sup>者ではありません。月の<sup>せかい</sup>世界から来たのです。次の<sup>つぎ</sup>満月<sup>まんげつ</sup>の<sup>ばん</sup>晩に<sup>つき</sup>月へ<sup>かえ</sup>帰らなければなりません。それで、とても<sup>かな</sup>悲しいのです。」

びっくりしたおじいさんは<sup>てんのう</sup>天皇に「かぐや姫を<sup>かえ</sup>帰らせないでください」とお<sup>ねが</sup>願いしました。満月の<sup>よる</sup>夜、<sup>てんのう</sup>天皇はたくさんの<sup>へいたい</sup>兵隊におじいさんの<sup>いえ</sup>家を守らせました。しかし、<sup>よなか</sup>夜中に家の<sup>まわ</sup>周りには不思議な<sup>ひかり</sup>光でいっぱいになって、<sup>へいたい</sup>兵隊たちは何も見えなくなりました。月の<sup>つき</sup>から<sup>くるま</sup>車が<sup>むか</sup>迎えに来たのです。かぐや姫が乗った<sup>つき</sup>月の<sup>くるま</sup>車は<sup>そら</sup>空を<sup>と</sup>飛んで<sup>い</sup>行きました。

ところで、かぐや姫は帰るときに、おじいさんたちに<sup>おく</sup>贈り物をしました。それは「<sup>ふし</sup>不死の<sup>くすり</sup>薬」でした。しかし、おじいさんとおばあさんはとても<sup>かな</sup>悲しんで、<sup>くすり</sup>薬を飲まないで<sup>し</sup>死んでしまいました。<sup>てんのう</sup>天皇はかぐや姫がいない<sup>せかい</sup>世界で<sup>い</sup>生

きていても、意味がないい みと思おもって、高たかい山やまの上うへで薬くすりを焼やかせました。それから、その山やまは「不ふ死しの山やま」から「富ふ士じの山やま」、そして、「富ふ士じ山さん」という名な前まえになったのです。